

# パウロは語る

日本基督教団  
 塚口教会  
 〒661-0012  
 尼崎市南塚口町  
 2丁目34-3  
 電話 06-6429-3019

## 賜った恵み

ガラテヤの信徒への手紙二・六一—〇

沖村裕史

パウロは語ります。  
 「彼らはわたしに与えられた恵みを認め、一致のしるしとして右手を差し出しました。」

福音にとって、割礼を受けているかどうかという、人間的な違い、条件は、何の問題にもなりません。大切なことは、すべての人に等しく与えられた恵みとして、福音を受け取るだけのことです。真実に恵みに与っている人は、また、自分以外に恵みに与っている人のいることを知り、そういう人を見つけた時に喜んで交わることが出来ます。なぜならばその恵みは、ただキリストの十字架によってのみ、信仰によってのみ与えられるものだから、自らが誇ったり、自分がどれだけ人より多く与えられているか少なく与えられているか、気にしたりする必要などないからです。ただ、同じ恵みを与えられているということが感謝であり、その恵みによってのみ生かされていることを、喜び合うことが出来ます。同じ恵みに与ってさえいれば、他の人に託せられた賜物や使命については、それが自分とどんなに異なっていて、尊敬し合い、相手を立て合うことが出来る、ということなのです。もはや、自分と同じやり方で同じ方向に向っていなければ、相手の

信仰も使徒性も認めないというようなことは、ここには見あたりません。ここに見ることが出来るのは、同じ福音、同じ「イエス・キリストのみ」の信仰があつてこそその交わり、与えられた恵みを認め合い、受け入れあい、生かしあう、キリストの体なる教会の姿です。一人として同じ人はいませんし、一人として同じ人生はありません。そのことがわたしたちの間に驚くほどの豊かさをもたらすのだということです。それこそが、キリストの福音であり、主の恩寵です。すべての根底に「神からの賜物」としか言いようのないものがあることを感じます。すべてのものは、わたしたち人間がつくり出したものではなく、ただ神によって与えられたもの、賜った恵み以外の何ものでもありません。造られたものすべてに、賜った恵みという他ないものが与えられています。

そのことを美しく歌った詩人がいます。金子みすゞという童謡詩人です。彼女の詩は読む者の魂を、静かに、しかし確かな力で揺さぶらずにはおられません。特に「私と小鳥と鈴と」という詩の中に綴られた、「みんなちがつて、みんないい」という言葉には、いのちを与えられたすべてのものへの愛のまなざし、一つひとつのいのちが持つ違いを賜物として慈しむ信仰が表現されています。しかしながら、それはただ、「みんなちがつて、そしていい」、つまり、違いを許容する、そこに留まるもののようにも思えます。あれでもこれでもよい、といった日本

的で、仏教的な、融通無碍の心境です。しかし、パウロが語る言葉は「みんなちがつて、そしていい」という信仰とは少し趣を異にするものです。それは、「みんなちがつて、そしてみんなかけがえない」、違うことこそが大切だ、と言えるものです。コリントの信徒への手紙一・一二章一二節から二七節で、違いを越えた、ひとつのからだとしての教会の姿についてパウロは語っています。

もし違いが違うだけであれば、ばらばらです。そしてその違いを諦めることができません。喧嘩をし、ついには分裂するということになるだけです。しかし、もし相違というものがなく、すべてが同じだったらどうでしょう。それこそ、空恐ろしいことです。あつちを見てもこつちを見ても同じ顔、同じ性質、同じ考え、そのことを求めるときこそ、わたしたちは、大きな罪を犯します。違うものを切り捨て、排除し、そのいのちを奪うことさえ痛みとしなくなるでしょう。それは、今もわたしたちの身近にある罪、わたしたちの悲しい現実です。

「もし足が、わたしは手ではないから、からだに属していないと言おう」ようになることでしょうか。しかし、手は手としての良さを持つてはいても、反対に、手では見ることも、嗅ぐことも聞くこともできません。このように、わたしたちは互いにその良さとともに、弱い点を持つています。ところがこの世の価値観から申しあげると、とかく良い点として上げられるものは、強さであり、誇りであり、他に対して優る所となります。その時、わたしたちは他の人を必要としなす。わたしは何の罪を犯していないし、赦す必要としないと思いがる人間になつてしまふでしょう。神ならぬ自分を神ごとくして、他者をかけがえないものとする

るのではなく、あの「偽の兄弟たち」のように、自分の優位に立つ道具にするでしょう。その時、キリストのからだは崩壊します。「相違を越えて一つのからだとなる」ということは、ただ「相違を受け入れる」ことではなく、「相違を必要とする、相違をそのままに、かけがえないものとする」ということです。パウロは、注意深く言葉を選びつつ、「むしろ、からだのうちで他よりも弱く見える肢体が、かえつて必要なのであり、からだのうちで、他よりも見劣りがすると思えるところに、ものを着せていっそう見栄えをよくする。麗しくない部分はいっそう麗しくするが、麗しい部分はそうする必要がない。神は劣っている部分をいっそう見栄えよくして、からだに調和をお与えになつたのである。それは、からだの中に分裂がなく、それぞれの肢体が互いにいたわりあうためなのである」と言っています。「かえつて必要なのである」とは、「はるかにもっと必要だ」という意味合いの言葉です。

わたしたちをそのままに愛して、わたしたちに先んじてわたしたちの罪を赦してくださるように、と祈つてくださったイエスさまが、わたしたちに指し示してくださっている福音、それは、わたしたちの關係、つながり、共同体で必要なのは、ありのままの姿を受け入れ、違いを認めることです。これこそが、パウロが切々と語る、十字架に示されたキリストの福音です。十字架は、愛の調和そのものです。であればこそ、「二つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しむ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶ」が出来ます。悩みを共にし、喜びを共にする、それこそが十字架の愛に生きるということにはかなりません。